

政治家に今必要なのは信念 傾聴力、人を大切にする 謙虚さでは

在仏コラムニスト 安部 雅延



世代交代のフランスに

老練政治家

今年9月6日、フランスでは2カ月の政治空白を脱し、ようやく首相が決まり、21日には組閣を発表し新年度をスタートさせた。今度の首相、中道右派・共和党に属するミシェル・バルニエ元外相（元欧州連合の対英離脱主席交渉官）は73歳、34歳の最年少で今年1月に首相に就任したガブリエル・アタル氏から引き継いだ。

この2カ月間、フランスは無政府状態で世界最大規模のスポーツツイベント、パリ五輪・バラ大会を開催し、基本的に有事の際はアタル氏率いる暫定政府が対処するしかなかった。その間、「政府がなくてもやっていける」「ベルギーは2年間政府がなかった」などと揶揄され、過去にフランスが経験したことのない無政府状態が続いた。

そもそも無政府状態に陥ったのはマクロン仏大統領の判断ミスによるものだが、そのマクロン氏も南仏ブレガノンで夏のヴァカンスを妻ブリジットと過ごした。6月に実施された欧州議会選は、各国が国内選挙を実施し、欧州議会に送り込む議員を決める仕組み

で国政にも影響する。

フランスは右派・国民連合（RN）が圧勝し、当然ながら仏国内政治でもRNの発言力が増すことは必至だった。焦ったマクロン氏は国民議会（下院）の解散総選挙を断行、結果はRNをある程度抑えられたものの、単独過半数の政党はなかった。

議会多数派が首相を推薦し、大統領が承認するのが通常のプロセスだが、議会に単独過半数や連立で過半数を得る政党がない中、首相任命は難航した。フランスはドイツや英国とは異なり、各党ともに政治信念が明確で他党と連立を組む選択肢は低い。

そこで8月下旬、各政党恒例のサマーカーン中、マクロン氏は各党代表と個別に協議を重ねた結果、バルニエ氏が選ばれた。条件は議会が拒否しない人物を選ぶことだった。政治的停滞を避けるために選ばれたのは、政治経験豊かな保守の重鎮でもあるバルニエ氏だった。

共和党は今や少数政党だが、かつてはフランスを代表する保守政党でシラク、サルコジなどの大統領を生み、マクロン氏が登場し、人気に便乗した共和党の議員が中道に移動した中、残つ

た64人の議員が共和党を維持している状況だ。

2017年以降、39歳で大統領になったマクロン氏、今年1月に34歳で首相になったアタル氏と若さがトレードマークのようで世代交代を印象付けた。デジタル化で第4次産業革命と言われる時代、世代交代は必然という風潮もあった。

右派と左派の古い対立を捨て、中道を引きつけて登場した若き金融界出身のマクロン氏は選挙で選出された議員経験もないが、時代の先頭を走る人物と見られた。しかし、金融界の手法を政治に持ち込み、議会審議を軽視し、トップダウンを徹底した結果、「民主主義を破壊する男」と言われ、8月の支持率は18%と低迷している。

そこで收拾不能に陥った政治停滞を脱するために選ばれたのがバルニエ氏だった。彼はマクロン氏の親の年齢で、バルニエ氏が政界に入った当時、マクロン氏は生まれていなかった。

欧米諸国は、基本的に日本のような経験主義ではなく、儒教の長幼の序も存在しない。さらにキリスト教は兄弟主義で、それも兄弟の年齢差が組織内の上下関係に影響を与えない。特に今

はDXが進み、AIとビッグデータによる第4次産業革命の只中にあり、その変化についていける世代への指導者交代が必須とされている。

卓越した

コミュニケーション能力

バルニエ氏の経歴は外相、農相を務め、最大の実績は欧州連合（EU）で、ブレグジットのEU側の首席交渉官を務めたことだ。相手は最初はメイ首相、次は離脱強硬派のジョンソン首相で、英国から送り込まれる交渉官は何人も交代した。

現実主義の英国は法律や原則より、状況に適切に対処することを優先させる。議会制民主主義の徹底で、交渉段

階でも議会が否決するのはしばしばだった。特に奇想天外な言動で知られるジョンソン氏は、様々な交渉術を駆使し、EUを苦しめた。

しかし、バルニエ氏は一歩も引かず、EUの原則を守り通し、ポールは常に英国に投げられていた。EUにとって加盟国の離脱は初めてのことであり、この交渉プロセスの記録は極めて重要な意味を持つ。彼は1600日の交渉を回想した著書『壮大な幻想』（ガリマール、2021年5月）を書き残している。

バルニエ氏の交渉相手は英国だけではなく、EUの加盟27カ国すべては合意が必要だった。EUには南北対立、東西格差があり、離脱による不利益を生じさせないために公正さを保ちながら、法的にも熟慮する必要がある。そのため、冷静沈着で理性的に行動することが求められた。

バルニエ氏は9月23日、組閣後の初めて全員が集まる閣議で「相手を尊重すること」「謙虚であること」「相手の話を傾聴すること」「学

ぶ姿勢の重要さ」を新聞僚

に強調した。仏南東部グルノーブル近郊の山間で育ったカトリック信仰を持つバルニエ氏は、物静かだが、信念と理性の持ち主として知られる。

新内閣に求められるのは、分裂して対立が深まる議会を統合し、政治の安定を取り戻すことだ。閣僚一人一人の忍耐、対立を協調に変えていく人間的程度が求められている。そのためにも傾聴力、人を尊重し、謙虚さを持った上でのコミュニケーション力が何より重要だ。

対英欧州離脱首席交渉官だったバルニエ氏の交渉目的は、壮大な欧州構想を持つEUから離脱する英国とEUの国家関係のリセットだった。それはまるで初めて同盟を結ぶ2国間で結ばれる条約のようでもあり、同時に離脱しても運命共同体は変わらず、特に防衛分野での協力は、ロシアの脅威から守るという意味でも極めて時間の掛かる交渉作業だった。

勝ち負けにこだわるジョンソン氏の激しい攻勢に対して、バルニエ氏は一歩も引かず、EUを守り通した実績は極めて大きかった。さらに彼は彼なりに「フランス政治を欧州全体に開放する」意欲を見せ、「愛国者とヨーロッパ

パ人」というEU構想のシンクタンクも設立している。

タフネゴシエーターとして知られるバルニエ氏は73歳だが、豊富な政治経験と実績は混迷に陥っているフランス政治の救世主となるかもしれない。

ただ、あまりの困難なミッションに、ある専門家は「もし、年末までにバルニエ氏が生き残っていたら、彼は歴史に残る政治家になるだろう」と言っているくらい困難が予想される。

今後、各政党は2027年の次期大統領選挙に向けた動きを加速させる。バルニエ氏は右派を代表する最高齢の76歳の大統領候補になる可能性もある。

タフネゴシエーターとして知られるバルニエ氏が、マクロン氏の決断が招いた混乱を抜け出し、どこまで粘り強く政党間の対立を抑えて国を安定させ、直面する課題に挑戦できるか。決して楽観視はできない。

政治の世界は世代交代が進めばいいだけでないことをフランス政治は物語っている。今、日本の政治家に足りないのも、傾聴力、人を尊重する姿勢、謙虚さを持つて学ぶ姿勢、コミュニケーション力と言えるかもしれない。

